

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520776

研究課題名(和文) タイ語プロパガンダ誌からみた戦時日本東南アジア関与とその変化

研究課題名(英文) Japan-Thai Relationship Seen from Pictorial Propaganda Magazines in Thai Language
Published by Wartime Japan

研究代表者

加納 寛 (KANO, HIROSHI)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30308712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、戦時日本によるタイ語プロパガンダ誌を体系的に収集し、記事や企業広告のデータベースを作成し、数量的にその傾向を捉えることによって、日本側がタイの人々に対して、軍事・科学・産業の先進性といった面をアピールしようとしていたことが明らかになった。また、タイ政府宣伝局史料からは、日本が無理をして製作したタイ語プロパガンダ誌は、タイの人々の関心を一定程度集めることには成功したが、これらの配布や販売はタイ政府側の警戒を招いたことがわかった。こうした日タイ両面からの史料収集と分析によって、従来は明らかになっていなかったプロパガンダをめぐる両国の関係性やその変化を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：In this project, I could systematically collect the pictorial propaganda magazines in Thai language published by wartime Japan and build the database of the articles and advertisements on these magazines. By analyzing the database, I could clarify that wartime Japan made strong appeals to Thai people for the cooperation by emphasizing Japanese advanced military, science, technology and industrial power. On the other hand, by analyzing the documents of Thai government, I could reveal that those magazines published by Japan succeeded in appealing to Thai people who were thirsty for those kinds of pictorial magazines, however at the same time drew caution and disturbance from Thai government. These both-sided observations show some new perspectives on wartime Japan-Thai relationship over the propaganda activities between two countries.

研究分野：東洋史

キーワード：南進政策 プロパガンダ 東南アジア タイ 大東亜共栄圏 文化 宣伝

1. 研究開始当初の背景

戦時期の日本にとって、東南アジア大陸部の中心に位置する独立国タイを政治的・軍事的に日本の傘下に収めることは、南進政策の重要な柱であった。タイに対する日本の影響力を高めるため、日本は様々な文化宣伝工作をも展開していった(加納 2001・2004)。申請者の本研究開始前の研究(加納 2009)から、戦時期の日本は、数多くのタイ語プロパガンダ誌を刊行していたことが明らかになっていた。

これらのタイ語プロパガンダ誌は、当時の日本がタイに対してどのような日本像をアピールしようとしていたかを如実に物語るものであり、戦時期日本の東南アジアに対する関与のあり方を考える上で非常に貴重な史料であるといえる。

研究開始時までの知見では、タイ語プロパガンダ誌は三類型に分類できたが、いずれの類型でも数多くのプロパガンダ誌が刊行されていたことがわかっている一方で、現存が未確認のものも多く、さらに未発見の史料の存在の余地も大きかった。

2. 研究の目的

本研究は、上記の背景およびこれまでの研究成果をもとに、タイ語プロパガンダ誌の収集・分析を通して日本の対タイ宣伝の意図およびその変化を、またタイ側の当該誌の受け入れ状況に関する調査等を通してそれらに対してタイがとった反応を、日タイ両国の視点から両面的に明らかにしていくことを目的とした。

これにより、戦時期の日本がタイに対して、何を伝えようとし、その意図はどの程度達成されたかを明らかにし、日タイ両面の視点から日本の東南アジア関与をめぐる国際戦略のあり方とその変化について新しい視覚を提供することに寄与する。

3. 研究の方法

(1) 日タイ両国におけるタイ語プロパガンダ誌収集とデータベース構築

まずは、日タイ両国において史料の所在確認を集中的に実施し、タイ語プロパガンダ誌データベースの基盤を作成した。さらに、その所在確認に基づき、タイ語プロパガンダ誌を閲覧・購入する。収集した書誌情報および所在情報を基盤としてタイ語プロパガンダ誌データベースを作成した。

(2) タイ語プロパガンダ誌の内容分析

データベースに基づき、各史料の構成について分析する。さらに、タイ語テキストの内容を、日本のどのような部分をどのように宣伝しているかに着目して分析した。また、タイ語プロパガンダ誌には、多くの広告欄が見られることから、広告欄に掲載されている企業等について調査することにより、どのような企業等がどのような意図をもってタイ語プロパガンダ誌に広告を掲載したかについ

ても考察した。

(3) タイにおける日本プロパガンダ誌に対する反応に関する史料収集・分析

こうして分析したタイ語プロパガンダ誌が、タイにおいてどのような反応をもたらしたかについて、タイ国立公文書館の史料を利用し、当時のタイ政府が日本側のタイ語プロパガンダ誌をどのように認識し、タイ国民に対する影響をどの程度に評価し、また対応していたかを明らかにした。

(4) 全体のまとめと成果発表

最終年度には、全体をまとめることで、タイ語プロパガンダ誌をめぐる日タイ関係を相互の視点から整理し、そこから見える戦時期日本の東南アジア関与の構造とその変化についての研究成果を、学会における口頭発表および論文として発表した。

4. 研究成果

以上の研究からもたらされた成果については、次のとおりである。

(1) タイ語プロパガンダ誌の収集

「大東亜」戦争期日本においては、多くの対外プロパガンダ誌が発行されていった。とくに著名なものは、1980年代末から2000年代にかけて復刻版も刊行されているグラフ誌『NIPPON』と『FRONT』であり、前者は名取洋之助率いる国際報道工芸が国際文化振興会の助成によって刊行し、後者は参謀本部の指導下で東方社によって制作された英文を中心とする対外宣伝誌であった。

こうしたグラフ誌の発行に関わった土門拳は、「対外宣伝雑誌論」のなかで、『NIPPON』、『サンライズ』、『太陽』、『東光』、『SAKURA』、『フジンアジア』、『ヒカリ』、『ニッポン・フィリッピン』、『カウパアブ・タウンオーク』、『FRONT』などの各誌を挙げている。また、陸軍省報道部の竹田光次は、「南方向宣伝雑誌」として、『ニッポン・フィリッピン』、『カウパアブ・タウンオーク』、『NIPPON』、『SAKURA』、『フジンアジア』、『太陽』、『新ジャワ』、『FRONT』を挙げている。これらは、発行部数が5千から5万部程度のもので、「殆ど夫々情報局から多かれ少かれ補助金を貰ひ、今や民間では姿も見せぬ特アト紙や上質紙やインキ等の特配を受けて出されてゐる」ような、物資不足の日本がとくに力を傾注した特別扱いのものであった。このなかでタイ語版があるのは『太陽』、『フジンアジア』、『カウパアブ・タウンオーク』、『FRONT』の4誌である。今次研究では、これらの冊子を購入したり複写したりすることにより、その内容を掌握することに成功した。

こうしたグラフ誌を含め、日本によるタイ語プロパガンダ誌は、次の3種類に大別することができる。

タイにおいて製作されたタイ語日本紹介冊子

タイ語のみによってタイにおいて独自に出版された日本紹介冊子群である。在タイ日本

政府関連機関といえる「日泰文化研究所」によって刊行された冊子が多い。たとえば、1940年には、タイ語を学ぶ日本人にも、また日本語を学ぶタイ人にも使用できるように工夫された『日泰会話』のほか、英文グラフィック『日本』をタイ人新聞記者にタイ語訳させて複製した『泰文日本』が刊行された。後者は、多数部を印刷し、有力者に配布したり中央官庁や県庁等に贈呈したりしていたという。さらに1941年、日泰文化研究所は、タイ語による日本仏教紹介書である『泰文仏教思想と日本精神』を刊行している。この書がタイの高官にも実際に読まれていたことは、同時代史料によって確かめられる。なお、この書籍の末尾には、全てタイ語による三井物産、大阪商船、横浜正金銀行等の企業広告が付され、上記『泰文日本』の広告やバンコク日本語学校の要項等も掲載されていた。1943年6月発行の『日本タイ協会会報』34号には、「盤谷市日泰文化研究所」から東京の日本タイ協会に、『泰文日本文化』、『泰文日本警見：岡崎学生見学団紀行文』、『泰文日本の学校案内』、『英泰文泰電工工業』、『英泰文日本仏教』、『英泰文日本人と仏教』が寄贈されたとあり、多くのタイ文日本紹介書が日泰文化研究所によって刊行されていることがわかる。このうちの何点かについては、実物を入手もしくは閲覧できたが、現存が確認できていないものもある。

対外プロパガンダ誌のタイ語版

日本において出版された、タイ語を含む言語で作成された対外プロパガンダ誌群である。参謀本部の指導下で制作されたグラフィック

『FRONT』は、英文を中心とする対外宣伝誌であるが、刊行初期の1942年から43年にかけてはタイ語版も発行されていたことが知られている。『FRONT』刊行に携わった多川精一は、タイ語のように「まだ日本人の研究者が少ない地域の言葉」については、「東南アジアから東京に留学している学生に」「協力を依頼することになった」と回想している。また、文字については、「このころ石井写真植字機研究所がすでに文字盤を作っていたので、書体の太さに不満は残るがこれを使用し」「タイトル用の、大型のタイ文字やビルマ文字は」「コンパスと定規で書き起こした」が、「いずれにしても書いている本人が読めるわけでないので、貼り込みのとき逆さに貼ってしまったたりするミスも何度か発生した」という。『FRONT』については、タイ語版は入手・閲覧できていないが、他国語版を閲覧した。

情報局の委嘱により朝日新聞社が発行していたグラフィック『太陽』は、「アサヒグラフの海外版ともいふべき」「南方地方啓発宣伝雑誌」であり、1942年7月から刊行されている。タイ語を含む多国語が併記されている。これについては、愛知大学国際問題研究所において所蔵することができた。

1942年9月より大阪毎日新聞社・東京日日新聞社によって刊行された『フジンアジア』も、

タイ語を含む多国語併記のグラフィック誌である。隔月刊であったが、現存が確認できるのは国際日本文化研究センター所蔵の第1号及び第2号のみであり、これらは閲覧・複写することができた。これらに用いられたタイ語についても、おそらくは『FRONT』と同様の取組がなされたものと推察できる。

これらのほか、鉄道省国際観光局によって出版された、タイ語を含む日本紹介冊子群が存在することが確認されており、その一部は愛知大学図書館に所蔵することができた。そのうちの1冊は、『現代日本(สมัยใหม่ปัจจุบัน)』と題された冊子の教育号であり、奥付によれば昭和17年3月に発行されている。ただし、刊行年が不明なものも多く、今後、鉄道省国際観光局の動向も踏まえてさらなる研究が必要である。

タイ文独自のプロパガンダ誌

と同様に日本において刊行された対外プロパガンダ誌であるが、基本的にタイ語のみで書かれ対タイ宣伝のみを指向する冊子群である。

1944年に第1号のみ発行された『日泰文化』は日本語とタイ語による雑誌である。名取洋之助率いる国際報道株式会社が印刷し、日本文化会館が刊行した。タイ文字活字は本誌刊行のため新鑄したという。3000部印刷のうち2000部はタイにて配布された。国立国会図書館など日本国内のいくつかの図書館に現存が確認されており、アメリカ議会図書館にも所蔵があった。一方、タイ国内においては現状では確認できない。

また、1941～44年にかけて、名取洋之助率いる日本国際報道工芸(後の国際報道)によって発行されたタイ語誌『カウパブ・タウンオーク』は、写真史研究によってその存在が知られており、国立国会図書館関西館、日本カメラ博物館、愛知大学図書館に所蔵されている。これまで紹介してきたタイ語プロパガンダ誌のうちで最も体系的に保存されているものであり、26巻までの刊行が確認されている。『カウパブ・タウンオーク』については、編集に携わった亀倉が「日本の現代文化面と日本の国力を生活的な立場からタイ国人に示す直接の手段として刊行されたのであるが、タイ国の生活感情や心理を考へてかなり通俗的なねらひに編集のポイントを置いた」と述べており、また同じく編集に関係した師岡は「情報局の指導による雑誌で」「無料で配布したのでは、宣伝効果がうすいというので」タイで販売したと回想している。また、タイ語を使うことができるスタッフはいなかったため、タイ人留学生2名を担当させたといい、亀倉や師岡が作成した記事を「英訳し、タイ国から来ている留学生に渡」して「タイ語のタイプライターで打って原稿に」し、「ページ別に符号を」付け、その符号をもとに雑誌を組み上げたとしている。「符号のほかは、何が書いてあるのか全くわからな」い、「言語のわからない者が、

海外宣伝の雑誌を作るというナンセンスな態勢」であり、さらに検閲についても、「それを情報局や軍報道部に持っていく」が「ここにもタイ語がわかる人はいないらしく、全部そのままパスしてタイ国に送られ」、「文章が問題になったことは一度もなかった」という。

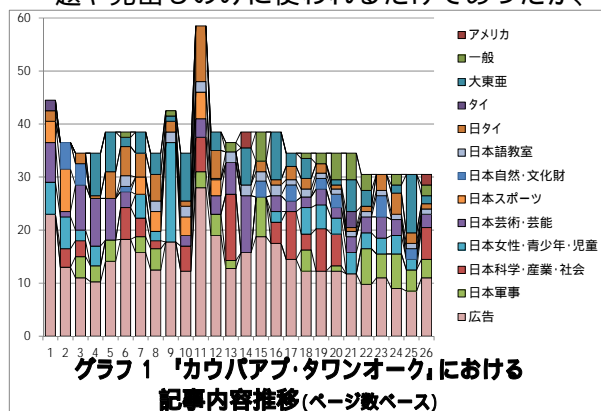
また、タイ文字については、『FRONT』誌における多川の回想と同様に石井写真植字機研究所の写真植字が活用されたことが述べられているが、だれもタイ文字が読めないために「凸版工が写真に写した膜を裏返しに貼ってしま」うことによって「文字は全部裏返し、つまり左右逆の文字に」なり、「それでもだれもわからず印刷製本し、発送直前になってタイの留学生に教えられて、大あわてをしたこともあった」というような状況が語られており、「情報局では町にももうアート紙がなくなっているというのにこの雑誌のために特別に配給があった」というように、日本は様々な無理を重ねながら、しかし「大東亜共栄圏」の人々に、彼らの言葉を用いて日本の宣伝を展開するために、タイ語もタイ文字も解さないながらにタイ語誌を製作していったことがわかった。

そのほか、今次研究によって、いくつかの新たなタイ語プロパガンダ誌が発見されたことは、本研究の大きな成果であったといえよう。たとえば、今次研究で入手した『マハーミット』誌は、日本軍の精強さを写真を通じてタイ人に伝えることを目的として作成されたと考えられる冊子であるが、これまでその存在は全く知られていなかった。

(2) タイ語プロパガンダ誌の内容分析

今次研究では、上述の様々なタイ語プロパガンダ誌のうち、対タイ宣伝に特化しており、完全に保存されている『カウパアプ・タウンオーク』の記事内容を全体的に観察することで、日本がどのような日本像をタイ側にアピールしようとしていたかを読み取ることができた。

各号のページ数は、概ね 32 ページから 40 ページの間であることが多いが、1号、9号、11号のみが 40 ページを超えるページ数をもっていた。1941 年 12 月発行の 1 号は、記事内容はほとんど全て英語であり、タイ語は表題や見出しのみに使われるだけであったが、



1942 年に入って発行された 2 号からは記事内容もタイ語となり、1942 年 8 月発行の 9 号からはタイ語・日本語が併記されるようになった。価格としては、1 号が 20 サターン、2 号から 5 号が 25 サターン、6 号から 26 号までが 50 サターンであり、当時の労働者の日給程度であることから、それほど安価ではないことがわかった。

記事内容については、各号別にページ数によって整理して示したのがグラフ 1 である。

『カウパアプ・タウンオーク』を通覧して気付くのは、まずは広告の多さであり、全体として、広告が内容の 40% 前後を占めていた。この内容については後述する。

記事としては、日本に関する記事が圧倒的に多く、広告を含む全体の 39.3% を占めた。時期によって日本語を併用しているとはいえ、タイに関する記事は、日タイ関係に関する記事を除くと 1 号と 21 号の 2 件しかない。ここからは、本誌がタイ人に日本を宣伝するための意図をもって製作されたことが読み取れた。逆に『日泰文化』誌のように日本人にタイを知らせようとする意図は、全く読み取れない。記事に付された日本語は、タイ人の日本語学習を便にするためのものと考えられる。

日本紹介記事に次いで、大東亜関係、日タイ関係を紹介する記事も多かった。前者では、戦況の紹介記事や、シンガポールやフィリピンなどの日本軍占領地における状況紹介記事などが目立つ。後者では、両国間の特別使節や会議などのほか、在日タイ大使館や在日タイ人留学生などの記事が目立っている。

その一方、「敵国」に関する記事は、戦況記事を除けばきわめて少ない。また、「敵国」についてはアメリカの軍人や銃後を皮肉った内容のみしか見られず、イギリス等の「敵国」についての記事は戦況記事以外には見られない。

日本に関する記事としては、日本の軍事や産業・技術に関する記事がコンスタントに多く、創刊号においてはほとんど触れられていないものの、概ね全体の 14% 程度のページ数を占めている。それに並んで目立つのは、女性・家庭関係の記事である。とくに 1 号・2 号では、15% 程度の記事比率を占めており、9 号では、「女性」に関する特集号も組まれている。化粧法や女性ファッションの記事も多く見られ、日本側はこの冊子をタイの女性向けとして考えていたように思われる。ただし 1942 年秋から翌年春にかけての 10 号から 15 号では女性関係記事が激減し、その代わりに轟有起子や月丘夢路といった日本人女優に関する記事が多くなっている。

また、舞台芸術や映画についての記事も多く見られ、これらの媒体が日本の魅力をアピールする手段として重視されていたであろうことが読み取れよう。初期に盛んにみられた日本の近代的な女性舞台芸術・芸能に関する記事は、1943 年 5 月発行の 15 号以降減少し、

代わりに映画や写真に関する記事の比率が増加している。とくに映画は、記事標題に見られる頻度が14回と非常に多く1943年5月発行の15号以降は毎回登場しており、1943年中盤以降に宣伝媒体として大いに活用されていたことが伺える。

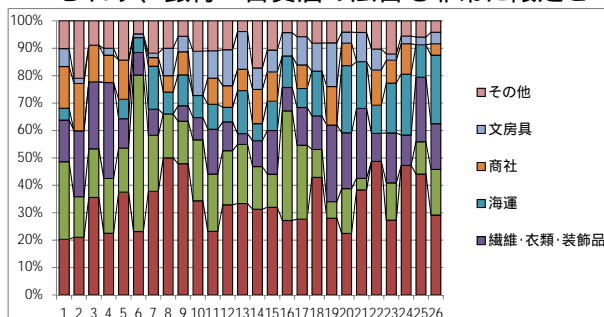
そのほか、初期に目立つが1943年以降になると見られなくなる記事としては、スキー・海・登山といった日本の自然を生かしたスポーツに関する記事が挙げられる。スポーツを顧みる余裕がなくなっていくのかもしれない。ただし、雪に関する記事はその後残り、とくに雪やスキーといった要素は、タイを含む「南方」に対して日本を宣伝するコンテンツとして有望視されていたことが伺われる。

日本の自然・文化の魅力を紹介する記事は、2・3号を中心とする初期と、15号以降の後期に集中的にみられるが、初期においては日本の自然紹介が主であったものが、後期には日本文化関係記事が増加している。ただし、全体としては3%弱のページを占めるにすぎず、日本は自然・文化的魅力よりは、その軍事や産業・技術面での魅力をアピールしようとしていたことが読み取れた。

(3) タイ語プロパガンダ誌の広告分析

今次研究では、タイ語プロパガンダ誌に掲載された広告についてもデータベースを作成し、分析を実施した。

その結果、『カウパブ・タウンオーク』誌においては、総ページ数の約40%を占める、計614件の広告が掲載されていたことがわかった。大阪に本社(本店等)をもつ企業の広告が最も多く半数を超えており(総ページ数の53.5%)、東京に本社等をもつ企業の広告がそれに次いでいた(同39.7%)。タイに支店もしくは事務所や代理店等をもっていることが広告上に明記されている企業は、約3割(総件数の27.0%)であった。業種としては、当時の日本国内雑誌等掲載広告と同様に、薬品・化粧品等の製造・販売広告が目立ち、広告全体の3割程度に及んだ。繊維関係企業も広告全体の1.5割程度と多く見られた。繊維を除くエンジン等の工業広告は広告全体の2割程度を占め、海運や総合商社の広告もそれぞれ広告全体の1割程度を占めていた。その一方、日本国内雑誌等の広告には多く見られたとされる出版図書関係広告は、ほとんど見られず、銀行・百貨店の広告も非常に限定さ



グラフ2 'カウパブ・タウンオーク' 広告業種別推移

れているのは、広告の受け手が広告の送り手と国境を隔てていることによるであろう。

使用言語としては英語が最も多く(総件数の88.8%)、次いでタイ語を用いた広告が半数弱(同43.3%)、日本語を用いたものは一割にも満たなかった(同9.3%)。推移をみると、英語使用広告は次第に減少し、タイ語・日本語使用広告が増加していることもわかった。業種別にみると、総合商社や保険会社・百貨店は、使用言語も英語のみを用いることが多く、タイ人読者に対する歩み寄りが弱いように思われる一方、繊維関係や薬品・化粧品関係の広告はより高いタイ語化努力が観察された。これらの商品を扱う企業が、とくに当該誌を手にするタイ人読者の「日常」に強く訴えかける必要性を有していたことが読み取れた。

今後、「大東亜」戦争期の日本が、フィリピンやジャワなど他地域向けに発行したプロパガンダ誌の広告を比較・検討していくことで、それぞれの地域への関わり方の同質性と異質性をより明らかにすることで、当時の日タイ関係の位置を再確認していくことができよう。

(4) タイ側の反応

今次研究の大きな特色の一つは、このような日本側が発行したプロパガンダ誌をタイ側がどのように受け取ったかについて、タイ国立公文書館等に所蔵されているタイ語史料から分析を実施したことにある。

研究の結果、これらの日本側の宣伝活動に対しては、タイ政府の宣伝局が監視を行い、報告書を残していたことがわかった。日本側の宣伝活動とそれに対するタイ側の動きについては、タイ国立公文書館に所蔵されている「タイ国内における日本の宣伝写真広報(การเผยแพร่ภาพโฆษณาของญี่ปุ่นในประเทศไทย)」と題されたファイル((2) สร0201.98.1/8)に収められた史料群から読み取ることができた。このファイルには、内閣書記官局において1942年10月から翌43年11月までに宣伝局長から受領したタイ国内における日本側の宣伝活動に関する文書が収められており、その中心を占めるのは「タイ国内における日本の宣伝活動について」と題された宣伝局長発内閣書記官宛報告書とそれに続く一連の報告書群である。

日本側プロパガンダ誌については、宣伝局の1942年10月10日付報告に、「タイ国内において写真が含まれた大量のタイ語冊子・新聞が普及した」とある。こうした印刷物は、いくつかの省の官吏には無料で配布され、一般の人々向けには書店において販売されており、タイ当局からは「日本の軍事力、文明そして様々な分野での発展について宣伝するもので、日本を好ませるように宣伝するもの」と目されていた。具体的な誌名としては、『カウパブ・タウンオーク』、『現代日本』、『FRONT』、『太陽』が挙げられている。前述の土門の列挙との相違は、『フジンアジア』

が入っておらず、逆に『現代日本』が挙げられている点である。

そのほか、1942年10月10日付報告によれば、タイ語で説明を施した大東亜共栄圏の地図や日本絵葉書を学校に配布した。

1943年3月18日付報告では、地方における巡回写真展の様子が報告されているが、ここでは日本人職員によってタイの人々に写真冊子等が配布された。配布されたのは、日本特別使節団のタイ訪問写真が印刷された『Bangkok Chronicle Pictorial Supplement』や、『現代日本：産業号』、日本における教育について書かれたローマ字マレー語の『Kemadjoean Nippon』であった。

こうした印刷物へのタイの人々に反応について、宣伝局長は「タイ国内では現在においては他のグラフ誌が少ないため、人々は喜んで大いに購入」していったと報告している。物資欠乏中の日本が無理をして特別に制作していたタイ語による豪華な印刷物は、同様に物資欠乏等のためグラフ誌に飢えていたタイの人々の間に配布・販売され、一定の効果を上げたようである。また、こうした宣伝印刷物は、別途、官公庁等にも贈呈されていた。ただし、こうして広く配布・販売されたはずの印刷物がタイ国内図書館等においてほとんど現存を確認できないことを考えると、対外宣伝雑誌のタイにおける配布や販売には、タイ政府側のある程度の妨害が存在した可能性も考慮する必要がある。

(5) まとめ

以上、本研究では、日本がタイに向けて展開したプロパガンダの内容を、日本によって発行されたタイ語プロパガンダ誌をめぐる日タイ両国の意図や動きを中心に、両面的に観察した。その結果、次のようなことがわかった。

日タイ文化協定上は双方向性が謳われながら、実際には日本からタイへの一方向の宣伝が展開されており、とくに戦局逼迫化にあつて紙の供給に無理が生じていても対外的には豪華なグラフ誌を刊行するなど、日本が対外宣伝を重視していたことがわかっているが、タイ語プロパガンダ誌もその流れの下に刊行された。その内容を観察すると、日本がタイ人のとくに女性に向けてアピールしたかった日本像は、自然や文化の魅力というよりは、軍事・科学・産業の先進性であったことが明らかになった。また、舞台芸術や映画は、日本の魅力をアピールするための手段として重視されていた。

こうした日本側からのタイ側へのアピールに対しては、タイ政府側は大いに警戒することとなり、宣伝局による監視の対象とされていた。物資欠乏中の日本が無理をして特別に制作した豪華なタイ語プロパガンダ誌は、そうしたグラフ誌に飢えていたタイの人々の関心を一定程度集めることには成功したようである。しかし、これらの一方的なプロパガンダ工作は、タイ政府側の対日不信・不

満の原因にもなったことがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

加納 寛、戦時期バンコクにおける日本側活動の空間的特性：1942～43年の宣伝活動を中心に、日タイ言語文化研究、査読有、第2号、2014、pp.27-41

加納 寛、日本の宣伝活動に対するタイの反応：1942～43、現代中国研究、査読有、第33号、2013、pp.56-74

〔学会発表〕(計 3 件)

加納 寛、戦時期日本のタイ語プロパガンダ誌企業広告にみる日本企業のタイ関与、日本タイ学会第17回研究大会、2015年7月11日、東京学芸大学(東京都・小金井市)

加納 寛、「大東亜」戦争期日本のタイ語プロパガンダ誌：『カウパアブ・タウンオーク』を中心に、東南アジア学会第93回研究大会、2015年5月30日、愛媛大学城北キャンパス(愛媛県・松山市)

加納 寛、戦時期日本のタイ語プロパガンダ誌、愛知大学・東呉大学・カリフォルニア大学国際シンポジウム「戦後」の意味：アジアにおける1945年とその後」、2015年4月11日、愛知大学車道校舎(愛知県・名古屋市)

〔その他〕

市民向け講演

加納 寛、タイと日本、愛知、そして愛大：友好の絆、愛知大学同窓会岡崎支部新年会、2015年1月25日、岡崎ニューグランドホテル(愛知県・岡崎市)

加納 寛、戦時期日本の対タイ宣伝、愛知大学言語学談話会公開講座『言語』、2014年5月10日、愛知大学豊橋校舎(愛知県・豊橋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加納 寛 (KANO, Hiroshi)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30308712